

## 【事業実施概要】（森町二地域居住推進コンソーシアム）

構成団体（森町、静岡県、一般社団法人モリマチリノベーション、ヤマハ発動機株式会社、国立大学法人名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター、ミテモ株式会社）

**事業名：静岡県森町二地域居住推進事業**

**令和8年3月**

# 森町二地域居住推進コンソーシアムにおける事業概要

## 事業の概要

【課題】地域の担い手不足解消、都市部のコミュニティ希薄化、二地域居住環境の整備(ソフト面・ハード面の整備、二地域居住者の費用負担軽減等と、それを実現する行政サービスの施策化・パッケージ化)

【取組】都市部の二地域居住候補者の調査及び森町住民に対する調査と、それをもとにした二地域居住ビジョンと行政計画や施策化を行う。山村資源活用による都市と地域の継続的な関係性を構築する。

【関連事業】

【コンソーシアム構成】静岡県森町、静岡県、(一社)モリマチリノベーション(支援法人)、ヤマハ発動機株式会社、国立大学法人名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター(CRAT)、ミテモ株式会社

## 森町二地域居住推進コンソーシアム

### 山村資源活用による都市と地域の継続的關係性構築

都市部のファミリー層が二地域居住をする目的・動機づけ  
=「親子環境教育」の構築



「森」豊かな自然資本と癒しの風景  
自然との関わりと教育



「里」農の営みと人の暮らしが息づく風土  
農を通じた食との関わりと教育



「町」伝統文化と生活が重なる誇りの拠点  
コミュニティ・伝統との関わりと教育



+



「支える環境」  
空き家活用、生活支援基盤の構築等

都市住民と持続可能な関係構築 = 地域活性(森町の担い手不足解消)

### 親子教育プログラムへの参加

協力 大手デベロッパー  
・高速道路会社

### 名古屋工業大学(CRAT)

・調査等に関する学術的見地  
からのアドバイス

### ミテモ株式会社

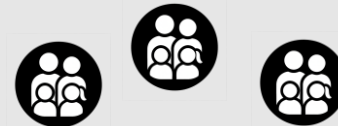
・全体企画  
・調査の実施、分析  
・二地域居住ビジョン形成及び  
行政計画反映への支援



調査・分析

・都市部へアンケート  
・森町キーマンへインタビュー

### 都市部コミュニティ



### 検討・検証事項

- ・森町における二地域居住のビジョン形成
- ・二地域居住者の支援策の施策化、パッケージ化、行政計画への反映
- ・二地域居住が、都市部・森町、双方のシビックプライド向上に寄与できるか

静岡県森町

- ・コンソーシアム統括
- ・行政サービス検討・構築
- ・行政計画への反映、施策化、パッケージ化

静岡県

- ・広域的地域活性化基盤計画との連携

(一社)モリマチリノベーション

- ・地域連携調整
- ・親子教育環境構築

特定居住拠点施設「pieces」

ヤマハ発動機株式会社

- ・親子教育環境構築
- ・二地域居住者への広報

ミليونバトルバイクパーク

# 取り組み事例①：森町の魅力・地域資源を再発見するためのインタビュー調査

<p>具体的な方法</p>	<p>森町の持つ資源や言語化されていない魅力を明らかにし、二地域居住促進に向けた基礎資料を整備することを目的として、地域関係者へのインタビュー調査を実施した。対象者は計20名(男性10名、女性10名)で、内訳は移住者10名、地元住民7名、関係人口3名とし、立場の異なる主体を横断的に抽出した。調査では、暮らしや働き方の実態、移住に関する動向、森町の特徴認識、本事業への期待の4観点を把握した。調査方法として、森地区・天方地区・三倉地区等を視察し、地域の生活環境や活動現場を確認したうえで、1~2時間程度のインタビューを実施した。</p> <p>さらに、結果を踏まえコンソーシアムメンバーや森町の地域関係者を交えたワークショップを開催し、内容共有と意見交換を通じて、地域の実情に即した課題認識や方向性への理解を深めた。</p>
<p>工夫点</p>	<p>本調査では、単なる聞き取りにとどまらず、現地視察と半構造化インタビューを組み合わせたエスノグラフィー的手法を採用し、生活実態や地域内の関係性といった現場の実情把握に努めた。</p> <p>また、移住者・地元住民・関係人口をバランスよく対象に含めることで、内部視点と外部視点の双方から地域の価値を抽出し、特定層に偏らない多面的な分析を可能とした。</p> <p>さらに、調査結果を住民および地域キーマンとのワークショップに接続し、分析内容の共有と対話の場を設けることで、調査成果に関する共通理解の形成を図った。</p>
<p>得られた成果や効果</p>	<p>本調査により、森町の地域構造を「三つの土台」と「三つの魅力」として体系的に整理・可視化することができた。すなわち、地区ごとに異なる景色と物語が存在する地域構造、ハレ(特別な機会や節目)と日常を共に紡ぐコミュニティ文化、自然環境と生活利便性を併せ持つ立地という基盤の上に、多様な人材の活動や地域資源が重層的に存在している実態が明らかとなった。</p> <p>また、ワークショップを通じて、地域内で暗黙知として共有されていた価値を言語化し、森町が「みんなのスイートスポット」とも言える、個々にとっての「ほどよい・ちょうどよい」暮らしが成立する地域であるという共通認識の形成につながった。</p> <p>本成果は、次年度以降の二地域居住促進施策、関係人口創出、受入環境整備等の政策立案および事業企画の基礎資料として活用する予定である。</p>



▲インタビュー調査結果を踏まえたワークショップの様子

みんなのスイートスポット・森町 ~あなたの「ほどよい・ちょうどいい」がきっとある~

**ユニークで魅力的な人の存在と活躍**

女性が元気ハツラツ！ユニークな活動を仕掛ける地域住民・移住者

暮らしに潤いを添えるマルシェ・イベント・アクティビティ

ぶぶぶの日、マルシェ、ミリベタ・eバイク、カフェ、哲学対話、たまどん…

山里の自然、暮らしや街並みに何気なく存在する原石のような地域資源

緑が美しい山や森、路地裏、店、歩くと見つかる魅力 =磨くと光る原石

**森町の魅力を彩る魅力**

**森町のベース**

**一つ一つの地区に、景色と物語が息づく**

地区ごとに特色・雰囲気があるそれぞれの地区で愛着・誇り

**ハレの日も日常も、共に暮らしを紡ぐコミュニティ**

祭り・町内会活動・田畑の管理 頼り頼られ、支えあう風土

**自然が豊かなのに、意外と便利な立地**

街中や近隣市町にすぐに行ける 高速道路などアクセス良好

▲インタビュー調査結果の整理(森町の魅力と基盤構造)

# 取り組み事例②：都市部のマンションコミュニティ、遠州森町PAでのアンケート調査

<p>具体的な方法</p>	<p>大手デベロッパーに協力を要請し、都市部のマンションコミュニティを対象としたオンラインアンケートを実施し、201件の回答を得た。移住・二地域居住の関心度、ハードル、森町の魅力、居住地に求める条件、子育て世代の意向等を把握した。</p> <p>また、遠州森町PAにおいて、利用者を対象に、森町の認知度、魅力認識、立ち寄り意向、お試し住宅への関心を把握することを目的として、対面でのアンケートを実施した。所要時間3分程度の簡易設問とし、回答者には森町のトートバック及び森町紹介パンフレット等を配布、35件の回答を得た。</p>
<p>工夫点</p>	<p>都市部のマンションコミュニティへの調査では、関心の有無だけでなく、行動に移れていない具体的な要因(経済負担・仕事・住居)を定量的に把握できる設問設計とした。また、子育て世代を独立分析し、戸建てニーズや「暮らしの質」重視傾向を明確化した。</p> <p>また、PAでのアンケート調査では、「どうすれば森町に立ち寄りたくなるか」が具体的に分かる設問にした。魅力や立ち寄り理由は複数選択式とし、実際の施策に直結する選択肢を設定した。また、県内外や訪問経験の違いで比較できる構成とし、ターゲット別に打ち手を検討できるよう設計した。</p>
<p>得られた成果や効果</p>	<p>都市部へのアンケートでは、森町の二地域居住戦略におけるターゲット像、具体的なハードル、必要施策の優先順位が明確になった。特に「経済的負担」「仕事との両立」「戸建てニーズ」「暮らしの質志向」という主要論点が整理されたことは、今後の受入環境整備およびPR戦略設計において実効性の高い基礎資料となる。</p> <p>また、PAでのアンケートでは、PA内での情報発信の工夫や移住者の体験談の紹介・発信、ワーケーションやペット同伴で立ち寄れる機会等へのニーズなど、来訪促進の具体的な声を聴くことができ、将来的な二地域居住につながる示唆を得ることができた。</p>



▲都市部マンションコミュニティ向けアンケート告知画像



▲遠州森町PAでのアンケート調査の様子

# 取り組み事例③:キーマンとの協働によるプロトタイプ開発

<p>具体的な方法</p>	<p>地域資源の活用方策を具体化するため、森町のキーマン(森地区・三倉地区・天方地区の地域住民等)と協働し、地域の現状や課題、来訪者との関わり方や地域の将来像について意見交換を行った。令和7年11月19日、12月26日、令和8年1月21日の計3回にわたり会議を開催し、議論を重ねる中で、3地域をつなぐe-Bike周遊のアイデアが提案された。</p> <p>本取組では、イベントを単発で終わらせるのではなく、「イベントから日常への展開」を目標に、地域内の移動・交流の仕組みづくりを検討した。</p>
<p>工夫点</p>	<p>企画内容を外部主体が一方的に設計するのではなく、地域住民を中心とした対話型の検討プロセスを重視した。</p> <p>具体的には、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各地区の実情や活動状況を共有</li> <li>・地域間の分断(移動・交流の不足)という課題を整理</li> <li>・小さく始めて継続可能な取組とする方針</li> </ul> <p>を確認するなど、丁寧な意見聴取を重ねながら検討を進めた。また、行政や外部団体主導ではなく「住民主体で無理なく続けられる活動」を基本理念とし、地域の日常の延長線上に位置付く企画となるよう設計した。</p>
<p>得られた成果や効果</p>	<p>検討を通じて、e-Bikeを活用して森地区・三倉地区・天方地区の3地域を物理的・心理的につなぐ周遊の方向性を整理し、地域資源を体験的に結び付けるプロトタイプ在具体像を構築することができた。また、地域関係者が主体的に関与する形で事業設計を行ったことにより、受入意識の醸成と地区間連携の基盤形成につながった。さらに、地域住民との継続的な対話を通じて、実施可能な運営規模や導線、役割分担等の現実的条件を整理することができ、次年度以降の実証事業化に向けた実装可能性の検証が進んだ。</p> <p>本成果は、次年度以降の実証事業化、関係人口創出施策、周遊・滞在型プログラム造成等の政策立案および事業企画へ反映する予定である。</p>



▲キーマン会議の様子



▲e-Bikeを活用した地域周遊の様子

# 本年度の成果と今後のスケジュール

## 事業全体の成果や効果

本事業は、当初、森町の山村資源を活用し、都市住民との交流や親子教育プログラム等を通じて二地域居住につながる関係構築モデルを検討し、将来的な施策化・パッケージ化を目指す構想として開始した。

本年度は、その構想を前提としながら、インタビュー調査、都市部アンケート調査、PAにおける調査、地域キーマンとのミーティングおよびワークショップ等を実施し、実際の地域条件や住民意向を踏まえた実現可能性の検証を行った。

その結果、森町においては、既存の暮らし・活動・地域資源を相互につなぎ、外部人材が段階的に関われる導線を整えることが重要であるとの認識に至った。そこで、地区ごとの魅力や活動を、森町の特徴であるe-Bikeで周遊することで、町全体の一体感と魅力向上を図りながら関係人口の創出につなげるプロトタイプを住民主体で企画した。

また、都市部およびPAでの調査を通じて、関わり方の入口は移住に限定されるものではなく、短期滞在や体験参加など段階的な関係形成が有効であることを踏まえ、関係人口形成を起点とした施策設計の方向性を確認した。

これらの取組により、本年度は、当初の構想を地域の実態に即した形へ具体化し、次年度以降の実証的取組に移行するための条件整理と地域内合意形成を行うことができた。

本事業の成果は、構想段階のモデルをそのまま適用するのではなく、調査と対話を通じて森町に適した実装モデルへと再構築した点にあり、今後の政策立案および段階的な事業化に資する基盤を整備したことが大きな効果である。

## 今後のスケジュール

令和8年度は、本年度整理したモデルを基に小規模実証を実施し、受入体制、運営方法、都市部参加者との関係構築手法の検証を行う。令和9年度以降は、検証結果を踏まえたプログラムの定期化、拠点機能の具体化を進め、段階的な実装を図る。